

平成 22 年度 第 4 回栄養学教育 FD/ICT 活用研究会 議事録

日時 平成 23 年 3 月 29 日 16 時 30 分 ～ 18 時 45 分

場所 私立大学情報教育協会 事務局 会議室

東京都千代田区九段北 4-1-14 九段北 TL ビル 4F

出席者 委員 武藤委員長、石崎委員、中川委員、酒井委員、室伏委員、小野坂(記録)

事務局 井端事務局長、森下主幹、松本職員

議事

1 記録者を小野坂とした。

2 資料の説明があった。特に、以下の最近の動向、将来の見通しについて話された。

- ① 教員から教わるという姿勢ではなく、将来を見据えて、学び続ける仕組みの構築の重要性
- ② 中学の総合学習でさえ、探究、協同、体験させ、そのうえグローバルな視点に立って実施する(サイバースクールバス)、学びと社会との関連が重要である
- ③ 中教審答申では、実践的な能力を育成する、それは企業などと結びついた実務的な演習的な授業によって行う。現実的には、専修学校などの高等教育化を国が行う。その影響として、4年生の大学のメリットは薄れ、栄養系の大学といえども安閑としておられない、との指摘があった。

今後の大学は、専門知識を教えるのではなく、リベラルアーツに努力を注ぐべきであること
また、新しい大学のデザインをして欲しい、それも 5 年後、10 年後を展望したものが要求されることが強調された。

委員からは、「栄養は単に専門知識を教えるのではなく、その既にそのようなリベラルアーツを取り入れて、4 年制になった」との発言があり、説明に賛意が示された。

学士力到達目標「食環境づくり(食情報・食物確保・食の消費と安全)などの必要性を理解し、実践できる」について説明があり(資料③.2)、主に授業計画及び ICT を用いた授業シナリオについて議論した。

事例 1: 食と健康の課題をさまざまな視点から考え、学生自らが計画、立案、実践、成果の情報発信、評価までを行う学生主体の体験型授業

モデルの授業シナリオでは、学生が、テーマを設定し、まとめ、それに基づいて積極的に行動し、それを評価すること、すなわち、大学と社会の連携・相互作用に特長がある。

このモデルは、大学の「学び」が社会の活性化に繋がり、そのような学修モデルが待たれていた、との発言・高い評価があった。

学生の評価については、担当教員だけでなく、その分野に精通した教員との連携が望まれる、との提案があった。さらに、テーマによっては、グローバルな連携も可能であることが指摘され、例として国連を介した貧困が挙げられた。

ステップの 10 として、社会にオープンにすることが提唱された。

事例 2: 産官学連携による食育活動の体験型学習

現在の栄養系学部の主題の一つとして位置付けられている食育教育のモデルについて、説明があった。具体的な形として、食育弁当の開発に係わる地域情報の収集を行い、地域における各種団体との連携が打ち出された。

食と生活環境の向上を目的とし、地産地消を実践している、

このような取り組みは、大学としては初めてであり、

地域との連携は周囲から評価されており、感謝状や表彰状が出されている、ことが話された。

「人集めが要点である」との質問に対しては、「B級グルメなどを打ち出せば集めることは可能、難しくないと趣旨の受け答えがあった。

「弁当として、コンビニ弁当というのは、制約が多すぎてよくないのではないか」という指摘については、「昼食との比較などを考えてみたい」とのことであった。

地域貢献が大学としての役割であり、それを念頭に置いた授業シナリオが評価された。

3 学士力到達目標「栄養マネジメントを実施できる」について説明があり(資料③.1)、質疑応答した。

まず、修正部分の説明があり、症例を大学サーバーに集積して、大学間共通の授業環境の構築が確認された。

授業のねらいの「④モニタリングについて、疑問」が出されたが、「①～③についても行う、それが授業のねらいの④モニタリングの方法を考える力を養うことに繋がる」とのことであった。

「情報を生活習慣と結びつける(イマジネーション)必要は無いか」との疑問については、「先に調査する」との応えがあった。

授業シナリオ⑨「判定表を作成させる」について疑問が出され、特に外部評価の必要性が指摘された。委員からは、「4年生なら、作成できる」「応用栄養は正常者のマネジメントであり、外部評価は臨床栄養学ではないか」との意見が出された。

4 今後の計画

4月の10日までに、開発モデルの例示を修正してまとめる。

5月には公表して、意見を集約する、と事務局から案内があった。